『探索』

率直にいって、リュイーズの足はポルメリアの四倍早い。
ケルマディクからメルクスの道程をポルメリアが十日あまりでこなしたなら、リュイーズは三日足らずで踏破する。
それでもうポルメリアとは八日あまりの差が出るのだが、
その分彼女はメルクスでの聞き込みや情報収集に時間を当てる事ができた。

とはいえ難民がひっきりなしに訪れ、そんな彼らを収容する為、
あるいは城壁を拡張する為の土木作業があちらこちらで盛んに行われているメルクスで、
彼らが難民になる原因となった赤き悪龍ロスペロッソを倒した英雄の話は、もはや旬とは言えなくなっていた。

お祭り騒ぎのパレードの後、街の人間は誰もクレドネエを見ていない。
公爵の宮殿で歓待されているらしいとか、それも飽きて旅立ったとか、
新たな龍退治の旅に出たとか、話は色々とあったが全て無責任な噂話に過ぎなかった。

唯一の収穫はパレードの時に盛んに飾られたクレドネエの似顔絵と言われるものが手に入ったこと、ぐらいだろうか。
想像で描かれたものかも知れないと、念には念を入れてリュイーズは複数の描き手によるものと思われる幾つかの肖像画を探し、
手に入れた。並べてみても著しく異なった印象の絵はない。恐らく、これがクレドネエという男の特徴なのだろう。この平凡な顔が。

それにしても、メルクスとはこんな巨大な街だっただろうか?とリュイーズは思う。
難民を収容し、彼らに仕事を与える為に始められた市域拡張と城壁拡張工事は、二期工事がようやく終了する様子だ。
噂によれば中原の戦乱から逃れてくる更なる難民を受け入れる為に、三期目の拡張工事が計画されているという。

これにリュイーズは違和感を覚えていた。

中原諸侯が領民の流出を憂うのは、人こそが労働力の源であり、兵士の供給源だからだ。
リュイーズを始め諸侯たちが想像し心配していたのは、メルクス公爵が難民たちを荒地の開墾や、村人が逃げ散ったり、
死滅してしまったかつての農地を開発にする為に活用する事なのだ。
鉱山や職人たちの加工業、漁業、林業など産業には様々な形態があるが、やはり一番の基本は農業である。
天候が順調であれば麦は実る。病が流行らなければ家畜も育つ。
どんな身分の者でも、一部の術者を除けば食わなければ話にならない。
農作物は作り手の腹を満たし、絶対に売れ残る心配のない、安心確実な商品でもあった。

ところが、メルクス公は聞いた限りでは、難民達をそんな開拓者として送り出す事もしていない。
全てをメルクスの建設に、つまり建築労働者として使い日当を支払っているのだ。

都市とは、結局のところ消費地である。
三十万人とも言われる現在のメルクスに住まう人々を食わせるだけでも膨大な食料が必要だ。

かつてのメルクスは大都市とはいえ数万人が暮らす街でしかない。
その何倍ものの住民を食べさせるだけの食糧をメルクス公爵領で生産できる筈がない。絶対に商品価格の高騰が起こる筈である。

ところが、メルクスの市場に混乱はなく、物価そのものも、日用品などはともかく、食料価格の高騰は起きていなかった。

「・・・メルクスは豊かで平和なのね」

一杯やりながら酒場の主人から情報を聞き出していたリュイーズはそんな感想をこぼした。

「いや、なに。公爵さまの工事現場で働いている奴らは、日当で食い物をもらっているんだよ」

「へぇ？」

「さすがに酒は配られないが、小麦粉とチーズと水は振る舞われるそうだ。
現金も支払われるが、難民なんて皆食う為に働いているから、それでも小麦粉やチーズや、飲み水の方が喜ばれるらしいよ」

「それだけの食べ物を確保したら市場に出回る量が減って、小麦もチーズも高くなるんじゃないかしら」

「ねぇさん、くわしいねぇ。よそじゃそうかも知れない。だがここメルクスだけは例外さ。
何でも公爵様おつきの吟遊詩人だか道化だかしている子供が凄腕らしくてね。
毎日毎日必要な食料や銭を調達して、まったく不足なしにしているそうだよ」

「驚いたわね」

口ではそんな事を言ってみたが、内心は怪しいと思う。
二十数万人の人々を食べさせる小麦粉やチーズや、おそらく一人当たり数枚の銅貨の事だろうとしても、
それだけの金を不足なく毎日調達するなんて、普通の人間にできる話ではない。しかも市場の混乱なしで！

「よほど凄腕の魔法使いなのかしら？」

「たぶんそんなようなものだろうよ。魔法使いは見た目通りの歳じゃないっていうからな。
だが名前は妙ちきりんだよ。『ワーム』と言うらしい」

「『ワーム』・・・」

確かに妙だ。ワーム・・・長虫、蛇、あるいは歳経た龍をそう言う。あまり良い趣味とは言えない名前だ。
もっとも、魔法使いには偏屈な者も多いから、悪趣味な自称を名乗って喜んでいる手合なのかも知れない。

・・・それだけならいいのだけれど・・・

リュイーズは少しだけ胸騒ぎを覚えた。

それだけの事を手に入れるのに三日を費やしたリュイーズは、メルクス公爵の宮殿を訪れ、
そして案内役の男に、クレドネエは所用と言ってアンゲルウルプに旅立ったと聞かされたのだ。

「クレドネエ殿の個人的な所用ですか？」

リュイーズの質問に顔色の良くない男は、動揺する事無く答えた。

「ええ。どのような御用かは存じませんが、随分慌てていらっしゃいました」

「公爵閣下のご依頼ではないのですね」

「『龍殺し』の英雄に、何を依頼するのでしょう？龍を退治していただくにしても、
暴れまわっていた赤き龍はクレドネエ殿が退治されましたし、
そうそう龍に人の世界を荒らされては、我々はおちおち暮らしていられませんよ」

男は苦笑している。内心呆れているのかも知れない。リュイーズにしてもそれ以上問い詰める材料がないのだから、諦める他ない。

クレドネエは半月ほど前に宮殿を出たという。その話が本当なら、とっくにアンゲルウルプに辿り着いているだろう。
もし男の話が嘘だとしても、中原勢力が混乱すればするほど利益を得るメルクス公爵にしてみれば、
宰相大公の死ほど望ましいものはない。ヤニース勢はここぞとばかりに味方の諸勢力を引き込み、
広大なフォリヴァス所領に襲い掛かるだろう。そうなっては、中原は支離滅裂になってしまう。

礼の言葉もそこそこにリュイーズはメルクス公爵の宮殿を辞した。そしてその足でアンゲルウルプへと向かう。
一刻も早く宰相大公の下へ辿り着き、警戒体制を整えなければならない。

早馬よりも早い彼女の足ならば五日もあれば『天使王国』の王都に到着できる。
風のように道を急いだ彼女は、それでも予定より一日早く宰相大公の執政宮殿に辿り着いた。

王都アンゲルウルプと言えば、二百年前までは諸侯の在都宮殿が立ち並ぶ壮麗な都であった。

王国を支配する天使達の公正で厳格な裁きの下、人々は戦乱もなく過ごした。
堅固で平坦で、そして真っ直ぐに伸びる石畳の街道が張り巡らされ、
王国としての税は安く抑えられていたから通商が活発に行われた。
時に天候不順や疫病が襲い掛かってきたが、天使達の処置は的確であったし、
七大公を始めとする貴族諸侯もそれにならって罹災者の救援に手を尽くしていたから、破滅的な災害とはならなかった。

全ては二百年前、天使たちが姿を消してから、その日から徐々に徐々に、王国は変質していった。
天使たちの政治を見聞きし、それを手本とした世代が為政者であった時代は、それでも平穏な日々が続いた。
しかし世代交代が進むにつれて、貴族諸侯たちの私利私欲に塗れた諍いが激しくなっていく。

最初の混乱は、宰相位を巡る争いだった。
王国と言いながら王位に座るものが存在しない『天使王国』で、辞職するまでは貴族を統率する立場に立つ宰相は、
事実上の王といって過言はなかった。フォリヴァスの宰相と対立していたシヴァース大公が政変を仕掛け、
フォリヴァス大公が失脚する。シヴァース大公が死没すると、彼と協力していたハガート大公が宰相位につく。
だがハガート大公は専横に振る舞った。今度はフォリヴァス大公がアカパイン、
イルーク、キスリング、ヤニースの大公と語らってハガートを追い落とす。

あとは目まぐるしく変化する合従連衡の嵐で、その時々に覇を握った大公家が宰相位につく事になった。
だが中原の混乱は『天使王国』そのものの権威の失墜にしながった。
四方の諸侯はそれぞれ独自に、通商権、利水権、課税権、ありとあらゆる権利を主張して争いを繰り返した。
争いの度に必要とされる膨大な戦費は課税として庶民の肩にのしかかり、過酷な税の為に蓄えを失った人々は、
一度の天災で立ち直る事のできない打撃を受け全てを失うようになる。
例え難民が溢れようとも、互いの勢力争いに熱中している貴族たちには、その姿は目に入らない。
いや奴隷として確保して安易な使い捨ての労働力にするだけだ。

問題を根本から解決しようという意欲もない。

かくして、分裂し諸侯が割拠するようになってからは、アンゲルウルプは都としての機能を失った。
かつては諸侯とその家臣たちが集まり、彼らの用途を満たす為に膨大な商品で溢れていたアンゲルウルプの市場は、
すっかり寂れ切っていた。今の王都は宰相の座所となっている以外に価値のない、空虚な廃墟に過ぎなかった。
貴族の宮殿は度重なる戦火で崩れ落ちている。雨露をしのぐ為に集まる難民、浮浪者の数も疎らだ。
ここにはフォリヴァス宰相大公の家臣団しか存在しない。彼らは自らの本国から全て持ち込んでいる。
アンゲルウルプに都市としての機能は期待されていない。
ただ『王都』という象徴的な意味、それだけがこの廃墟に残されたたった一つの価値なのだ。

フォリヴァス家の家臣団以外の住人が一万人を切っているこの街で、
フォリヴァス家の家臣以外のよそ者を見つけ出すのは、それほど難しい事ではない。
問題なのは往時の繁栄を偲ばせる膨大な廃墟の数だ。その中に紛れ込まれると探すのも一苦労である。

リュイーズは人気ない廃墟に目もくれず通り過ぎると、
広大なアンゲルウルプの中でただ一つ活気らしきものがある執政宮へ辿り着いた。
向かうのは彼女の同僚である調査官たちが詰めている一角だ。

「相変わらず早いな」

ケルマディクでの顛末を報告されてからほとんど日がたっていないのに、もう帰還したリュイーズを見て仲間達は口笛を吹いた。
だがリュイーズの方は仲間達の軽口に付き合うような気分ではない。

「連続暗殺事件の容疑者クレドネエの足取りと似顔絵を手に入れました。奴はこのアンゲルウルプに向かったらしい」

「それで血相を変えて戻ってきたという訳か。しかし似顔絵を手に入れたとは、そつがないな。どれ」

差し出されたいくつかの肖像画を、盗賊あがりの主任が手に取る。彼は机の上にそれを並べて眉をひそめた。

「特徴がないのか特徴か・・・探しづらいな」

「この似顔絵を元に、衛兵や街のギルドに回す肖像画を起して欲しい。できる？」

机を覗き込む女ドワーフにリュイーズは尋ねた。

女といえどもドワーフはずんぐりとした体格をしており、人間やエルフの女性のようなたおやかさや艶やかさとは無縁だ。
だがだからといって不精である訳ではない。むしろ調査官の中では随一の手先の細やかさを誇っている。
かつては偽造美術品を作り売りさばいていたのだから、肖像画を描くなどお手のものだ。

だがそんな女ドワーフも眉をひそめる。

「描きにくい顔だ。こうまで特徴がないと、どこから絵を起していいのか解らん。厄介な相手だな」

「時間がかかるか」

「そうだな。一日くれないか。それで元絵をつくる。複製の方は絵ができ次第かからせよう」

「頼む。衛兵隊とギルドの方へは私の方から通告しておく。閣下への報告はお前がするか？」

主任は一応リュイーズへ尋ねる。
調査官というフォリヴァス家特有の組織ができた時から、主任は宰相大公の側近として働いている。
だが組織運営にかかる手間を一手に引き受けている現在、
カシュール宰相大公の側近くに控えるのはリュイーズや他の若手が多くなっている。
彼女を報告にやらせて、そのまま警護に付かせるというのが一番自然で手早い対応だ。

だがリュイーズは首を振った。

「他の者にお願いしましょう。私はクレドネエを捜索します」

「衛兵や街の自警団からいい顔をされないと思うぞ。それに連中の方がアンゲルウルプの『街』の事は良く知っている」
街とは言っても実際に人が住んでいる建物はその百分の一以下だ。
残りのほとんどは、戦火に焼かれ破壊され、良くても建材を奪われ、醜い廃墟となっている。
何が潜んでいるか解らない危険地帯だ。

しかし、だからこそリュイーズは自分が捜索の手に加わるべきだと感じていた。

「もし、クレドネエが暗殺実行犯であるならば、それは間違いなく貴方を凌ぐ手練れです。
貴方は、人の出入りの激しい執政宮殿に、人知れず潜入し、閣下を殺して気付かれずに逃れる事ができますか？」

「ハガート当主の件を言っているのか？あそこと執政宮殿では警戒態勢が違う。
あっちはお祭り騒ぎの中に紛れ込んで潜入できた。だがこっちは最初から暗殺者を警戒しているんだぞ？」

「クレドネエは主任よりも若い。動きは機敏だし力もあるでしょう。違いますか？」

「それでお前が出張るというのか」

「私の腕はご存知の筈です」

リュイーズは拳を武器とするモンクだ。重要参考人のクレドネエを生きたまま捕らえる術を彼女は持っている。
そして、正面の打ち合いならば、調査官の中で最も腕利きであると言える。
体裁きで敵の攻撃をかわし、武器を持たずに行動するので警戒される事がない。

だが、解っている限りでもクレドネエの暗殺者としての腕は一流と言える。
いかにリュイーズでも不意打ちで急所を狙われたら、それでも勝てるだろうか？

主任はしばし迷ったが、結局リュイーズの言うとおりにさせる事にした。
宰相大公直属の彼女が、大公の指示を仰がずに一線での探索に加わるのは問題かも知れないが、クレドネエの戦闘力を考えれば、
ギルド員や衛兵あたりではかなわないかもしれない。
大公直下の調査官といえども十数人しかおらず、それも中原や南方、東方、北方へと分散している。
クレドネエの件は、今アンゲルウルプにいる人数で対処するしかない。

「解った。閣下にはこちらから申し上げておく」

「ありがとうございます。あ、それから、一つ調べていただきたい事があるのですが」

「なんだ」

「メルクス公爵の身辺に『ワーム』と名乗る少年の姿をした魔術師がいるらしいのですが」

「それが？」

「最近のメルクス公の事業、その資金や物資などの調達に関わっているようです。それもメルクス市の物価を抑えながら」

「・・・本当か？二十万とも三十万とも言われる難民を食べさせるだけでも、かなりの食糧を買い占めなければ確保などできないぞ」

「市民生活に混乱はほとんど起きていません。
メルクス公の宮殿でその人物を尋ねれば良かったのですが、何故か失念してしまって・・・」

今から思えば不思議な事だ。市民生活に影響を及ぼさず、資金、食糧、建設資材を調達する『ワーム』なる魔術師について、存在だけ噂話で聞き知って、それから深く調べようとはしなかったとは・・・思い出すだけで赤面したくなる失敗だ。
おそらくクレドネエの行き先が宰相大公のいるアンゲルウルプと解って焦ってしまったからだろう。
リュイーズはそう思う事にした。

「・・・仕方あるまい。その『ワーム』とやらについての調べはこちらで進める。
それだけの物量を操れる術者など、そうざらにはいまい。宮廷魔術師長とも連携をとって調査しよう。クレドネエの件は任せた」

「はっ」

主任との打ち合わせを終えたリュイーズは、その足で衛兵隊長の元へ向かった。
まだクレドネエの似顔絵は完成していないが、広大なアンゲルウルプの廃墟の中で、何処に人が住んでいて、
何処に住んでいないのか。どのようにして手分けしてクレドネエを探すのか。今度は彼らと打ち合わせをしなければならない。
とはいえ、衛兵隊が把握しているのは宮殿周辺とアンゲルウルプの有力者の邸宅、あとは主要な市場ぐらいなものだ。
彼らはフォリヴァス家の衛兵であってアンゲルウルプの衛兵ではない。

衛兵隊長は街の有力者である市長や各ギルドの長などを明日までに招集すると約束した。
彼らにとっても主君である、カシュール・フォリヴァス暗殺を企むかもしれない人物だ。本腰を入れて探さなければならない。

翌日の昼下がりに、リュイーズは女ドワーフの同僚が完成させた似顔絵を一枚持って衛兵隊長の部屋を訪ねる。
だが既にアンゲルウルプの有力者たちと会議室に集まっているようだった。
そちらへ行ってみると、一枚の地図を見ながら壮年から老年の男達が口々に意見を述べているのが見える。

彼らから見ればリュイーズなど小娘も同然だが、もっと高位の貴族とも平然と渡り合う彼女に気後れなどなかった。
彼女には宰相大公直属の調査官であるという地位があるのだから。

「宰相大公閣下直下の調査官、リュイーズ・ポントワです。今回は皆さんのお力を拝借させていただきたい。
確かな筋からこの男が、アンゲルウルプに潜入したとの情報を得ました。
名前はクレドネエ。盗賊ギルドが名前だけ把握していた男です。
彼には、ヤニース、ハガート、シヴァーズの高位貴族を暗殺した容疑がかかっております。

彼を捕らえ、その容疑を調べあげ、彼の背後にいる暗殺事件の黒幕を解明する事こそ、
目下風雲急を告げる中原に平和を取り戻す事になるでしょう。
当然、アンゲルウルプに襲い掛かるであろう、戦乱を回避する事にもなるのです。ご協力願いたい」

クレドネエの似顔絵を地図の上に差し出して、リュイーズは異論、反論を挟ませないように一気に用件を述べた。
そうでもしないと小娘に顎で使われると感じた男達が、些細な言葉をあげ連ねて不毛な議論を吹っかけてくるかも知れないからだ。
その予感はすぐさま的中した。

「中原に平和を取り戻すとおっしゃるが、一連の暗殺事件で反対派諸侯を抹殺できた宰相大公閣下こそ、
この件の一番の受益者ではありませんかな？暗殺者を探し出す事の意味があるとは、とても思えませんがね」

アンゲルウルプで一番の実力者と自認している金融ギルドの幹部だ。壮年の押し出しのいい体格の男である。
銀行関係は何処の都市でも評議会の重要メンバーとなる。金と人脈が豊かだからだ。
人口が一万人を切るような現在のアンゲルウルプでもそれは変わらない。

しかしこの男は少しばかり気負い過ぎているようにリュイーズには見えた。所詮『小さな』アンゲルウルプの金融業者である。フォリヴァス家の財政を預かるのは、フォリヴァス家の直轄領都市の、
それこそ中原はおろか南方や東方とも取引のある大銀行であって彼らではない。

リュイーズは下手に出るよりも嵩に掛かった方が、話が早いと判断した。
彼は、フォリヴァス家に意見して仲間達に自分の地位と力を確認させたいのだ。
恐らく彼から憎まれる事になるだろうが、すぐにもクレドネエ探索に掛かりたい彼女には、
小さな街の有力者の面子などにこだわるつもりはなかった。

胸をそらし腰に手を当てたリュイーズはやや冷笑を含め、見下すような態度で男の質問に答えた。

「宰相大公閣下が利益を得ていると？中原の安寧、ひいてはテッラムリア全体の平和を望まれる閣下が、
一体この件の何処で利益を得られたのか。三人の大諸侯が殺されて得たものといえば、
中原の戦乱と、南方の野心家の侵略を招いたことだけ。これの何処に閣下の利益が含まれると言われる？

それに、中原で戦いが起これば否応なくアンゲルウルプは巻き込まれる。
ここが『天使王国』宰相の在所である限り、宰相位を望む大諸侯は必ずここへ攻めてくる。
我々フォリヴァス家が撤収したとしても、覇権を望む諸侯の大軍が必ず駐屯してくる。
それがどういう結果をもたらすのか、私が口にしなくても賢明な皆さんはとうの昔に理解しておられると、思っていましたが？」

街の有力者たちは互いに顔を見合わせた。
金融ギルドの幹部も言い返したくても返す言葉が見つからず、口惜しそうにリュイーズを睨んでいる。

軍勢が来ると言う事は、破滅が来ると同意義でもある。
軍勢を指揮する諸侯と繋がりがあり、その軍勢に略奪などを禁ずる命令を下してもらったり、
自分たちの家や会社、神殿などだけでも略奪の対象から外してもらう命令書をもらったとしても、
一定の拘束力があっても絶対ではない。

集められるだけ集められ、腹を空かしてやってくる軍勢の雑兵たち。
強盗とさして変わらぬ彼らがやってきたら、身を守るのは自分たち以外にない。
そしてそれだけの力を皆持っている訳ではないのだ。

特に、やってくるのが遠い南方の軍勢ならば、その主は馴染みのない見ず知らずの諸侯であり、
自分達を保護してもらうよう説得する事も容易ではない。

戦いになって一番困るのは、自分の直轄地に引き上げればいいフォリヴァスではない。ここで暮らしてきた自分たちなのだ。

相手が怯んだと見てリュイーズは重ねて言う。

「この危機に際して、この街を戦いから救う方法。
それは暗殺の真犯人を捕らえ、いたずらに戦いを引き起こすヤニース家に突きつけてやる事。
それ以外にはありえません。大義を失った彼らは兵を引くでしょう。
それでも戦いを止めなければ、義を失ったヤニースは他の中原諸侯から攻められる立場に立つでしょう。
宰相大公閣下を非難する者がいなくなれば、アンゲルウルプが戦場となる事もないでしょう。

お解りいただけましたか？」

男達は渋々抗弁する事を諦めた。小娘のようなリュイーズに言い負かされるのは癪だが反論できないのだ。
その空気を見てリュイーズは矢継ぎ早に話を進めた。

「では、まず最近宿屋に宿泊している若い男の確認を。
それから雨風をしのげる廃屋を調べ、たむろしている浮浪者に該当年齢の男がいないか確認していただきましょう。
また、各有力者の方々の屋敷等に最近雇われた男たちも確認対象にしていただきたい」

「最近とは、どれぐらいか」

よそ者に仕事をされては面目丸つぶれになる盗賊ギルドは意外に協力的で、意味のある質問をしてくる。

「ここ一ヶ月余りでよろしいでしょう。暗殺事件が始まった前後から、この街に来た者を確認して下さい」

「その根拠は？」

「気まぐれで大貴族を暗殺する筈がない。賊の目的が中原の混乱であるならば、宰相大公閣下も標的の一人になる筈。
当然下調べをするでしょう。最初の暗殺前後から続けて次に狙う貴族を調べ、殺しやすい者から手をつけるのでは？」

リュイーズの答えに納得したのか、盗賊ギルドの長はうなづいて引き下がった。

「宿屋、廃墟、浮浪者の方は自警団にお任せします。有力者の方々の屋敷の方は衛兵隊で調べさせていただきます」

この彼女の言葉には動揺が走った。街の有力者たちは街の貴族に等しい。
彼らは自分たちの屋敷内を私的な特権空間と心得ている。つまり治外法権を持っていると認識しているのだ。
それが部外者、それも一応アンゲルウルプの支配者といってもいいフォリヴァス家の衛兵隊であっても捜索されると言う事は
自尊心を傷付けられる行為であった。当然不平不満の声があがるだろう。だがリュイーズは続けて言った。

「宰相大公閣下の宮殿は自警団に捜索していただきます。それが公平と存じますが」

男達はまたしても振り上げそうになった拳を納めざるを得なかった。
自分たちだけでなくフォリヴァス家も治外法権をこの件に限って放棄するというならば納得せざる得ない。
かわりに衛兵隊長が屈辱で真っ青になったが、リュイーズは構わなかった。

「クレドネエの似顔絵はただいま配布しております。相手は凄腕の暗殺者ですから、
自警団の方々は発見次第、衛兵隊もしくはフォリヴァス家調査官までご連絡いただきたい。
くれぐれも手出しされぬよう、見失わぬようお願いします。命の保証はいたしかねますから」

盗賊ギルドの幹部以外は、彼女の言葉にうなずく他にない。
自警団といっても傭兵あがりや冒険者くずれが数人いる程度で、大半は腕っ節だけを誇る素人に過ぎないのだ。
血気に逸る若者を説得するのは骨だが、いらぬ犠牲を出す必要はない。

「・・・彼を野放しにする事、あなた方にお任せする事はギルドの面子に関わるのだがね」

盗賊ギルドの幹部は静かにリュイーズを睨む。しかし彼女は平然としていた。

「命の保証はできないと申しているのです。それに彼を生きて捕らえる事が重要です」

「死んでいても、その証言が取れれば問題なかろう」

死を司る神に仕える神官ならば、口おろしの呪文も使える。神官の呪文に拘束力があるならば、死人に口なしなどとは言わせない。殺した後でも証言を取る事は可能だ。だがリュイーズは妥協しなかった。

「彼には、生きて証言してもらい、そして諸侯、群集が見守る中で刑に服してもらわなければなりません。中原諸侯を殺した報いを、誰にでも解る形でテッラムリア中に示さなければ」

「それが目的か。我々がクレドネエを捕まえたら幾ら出す？」

「要交渉です」

「解った」

盗賊ギルド幹部との話は終わった。自然と解散になる。
アンゲルウルプの有力者たちが去った後にリュイーズに噛み付いたものがいた。衛兵隊長だ。

「ポントワ殿、いかに宰相大公閣下直下と言えども、我らの職権を侵される権限は、貴公にはないはずだ」

自警団に宮殿を捜索させるという発言が気に入らないのだ。隊長は湯気が出るほど赤くなっていた。
が、リュイーズは気にした様子もなかった。

「連中は素人です。通り一辺、納得できるまで見せてやればよろしい。
それで自分たちの屋敷を家捜しされる鬱憤が晴れるなら安いものではありませんか」

「盗賊ギルドも素人か？！」

「ああ。彼らには新規雇用者の尋問をお願いしましょう。それなら連中も嫌とは言えないでしょう。
しかしそれよりも、隊長。念を押しておきますが、くれぐれも衛兵隊のみでクレドネエ捕縛に向かわないで下さいよ。
奴は警戒厳しい大諸侯の城内へも、まったく気付かれずに潜入し、襲われた当人にもほとんど気付かれずにその命を奪っています。
奴を発見したら、必ず調査官まで報告して下さい。情況によっては騎士団の精鋭に出馬願わなければならない可能性もある」

「そんな大袈裟な・・・」

一般兵卒からの叩き上げとはいえ、衛兵隊の役割は夜回りや犯罪者の逮捕などである。
実戦経験などほとんどない。対して騎士団の精鋭ならば龍とも戦える実力がある。相手は腕利きの暗殺者といえども人間である。
そこまでする必要があるとは衛兵隊長には思えなかった。

だがリュイーズにとっては脅しでも何でもなかった。

「クレドネエは、あの『城砦落とし』と旅をし、彼女の龍殺しの仲間達の中で、『城砦落とし』以外に唯一生き残った男です。
侮って取り逃がす訳にはいかないのは、隊長殿とてご理解いただいていると思ったのですが？」

「確かに承知しているが・・・しかし・・・」

フォリヴァス家の軍事力と勝利の栄光を担うのが、フォリヴァス家宮廷騎士団であるオヴェスマーレだ。
『天使王国』中期よりフォリヴァス家の勃興、繁栄、勝利を担ってきた気品、勇猛の誉れ高き騎士団。

翻って衛兵隊は日々の治安を預かる重要な任務とはいえ、騎士団ほどの華やかさも地位もない。
衛兵隊長にしてみれば、自分たちが担う職権で騎士団の出動など仰ぎたくないというのが本音だった。

だが衛兵隊長の面子を重んじて、クレドネエに逃げられ、その結果宰相大公閣下を死なせる事にもなったら取り返しがつかない。
リュイーズは隊長の顔に息が吹きかかるような位置まで近付き、柳眉を逆立てて睨みつけた。
そして隊長が生唾を飲み込む音を聞き、その耳元で囁いた。

「部下をことごとく失い、宰相大公閣下の命すら危うくする事態になれば、面子どころか何もかも失う事になります。
もしも隊長殿がクレドネエ捕縛の指揮を取られ命を落とされる事になったら?それよりも、閣下の身辺に危険が及んだら?
隊長、貴方はその責めを一身に背負う覚悟がおありか?」

そういわれれば、衛兵隊長はもはや反論する事ができなかった。
結局のところ、彼は命令どおりに任務を遂行する兵士に過ぎなかったのだから。
小娘であってもリュイーズの潜り抜けてきた修羅場や陰謀、策略の数々は、彼の想像できるところではなかった。

脅して衛兵隊長を黙らせたリュイーズはアンゲルウルプの最新地図とにらみ合いを始めた。
この街の地理を頭に叩き込んでおき、知らせが入ればすぐにでも駆けつけるつもりなのだ。

衛兵隊長には、ああいったが、リュイーズはオヴェスマーレ騎士団の手を借りるつもりはさらさらなかった。
クレドネエ捕縛は、最初からこの件に関わってきた自分自身の手でやるべきだ。
それが自分を信頼して任せてくれたカシュール宰相大公への責任であり、
辛くあたってしまったポルメリアへの詫びなのだと、彼女はそう考えていた。

三日ほどは何事もなく過ぎていった。衛兵隊による有力者たちの屋敷捜索も、自警団による執政宮殿探索も空振りに終わった。
執政宮殿に関しては衛兵隊の捜索も平行して行われたが、身元確認が厳重な宮殿関係者には怪しげな者は存在しなかった。
有力者の屋敷に関しても臨時雇いの者はともかく、正規に雇い入れる者は縁故や代々仕えている者がほとんどだから、
よそ者が入り込む余地は少ない。

捜査の重点は広大なアンゲルウルプの廃墟に移らざるを得なくなった。
かつては百万の人口を数えながら、今ではその百分の一以下の人間しか住んでいない街である。
放棄された建物のほうが圧倒的に多い。

度重なる戦乱で焼かれ、崩壊した建物も多いが、しかし『天使王国』最盛期に建てられた堅牢な劇場、
公共浴場、競技場といった建物は、そう簡単には壊れたりしない。今でも浮浪者や庶民が勝手に住み込んで家にしている場合もある。

それら一つ一つを捜索するのだから手間がかかる。

執政宮殿は既にオヴェスマーレ騎士団が出動し警護を固めている。
衛兵隊、調査官、そして自警団は日のあるうちは総出で廃墟を調べる事に専念する。

リュイーズも例外ではない。
ただ調査官主任に最優先で発見の連絡をもらえるようにテレパスの送受信ができる耳あてのような魔法の道具を借りている。
それを持ち歩き、ある時は衛兵隊、ある時は自警団とともに廃屋探査を続けた。

古いアンゲルウルプを象徴するのは、近在で豊富に取れる白大理石を使用した建物だ。
圧倒的多数は安価な煉瓦で建てられた物ばかりだが、
二百年の歳月の重みに耐えられる建築物は、さすがに白大理石を使用したものが多い。

かつては利用者の目を楽しませる為に、神々や偉人の胸像、彫像が飾られ、素晴らしい絵画が壁にかけられていた。
床には美しいタイルのモザイク画がつくられ、かつて王都に居住していた人々の美的感覚をうかがわせる。

だが、今となっては、それは全て幻だった。

見る目を持った略奪者に出会えた美術品は奪い去られ、価値を見い出さなかった者は彫像を破壊し、絵画を破り燃やし、汚した。
美しいモザイク画は省みられる事なく、手入れされる事なく放置され、年月とともに削られていく。
見事な白大理石の石材は、新しい居住者の屋敷を飾る為に奪われた。

アンゲルウルプの廃墟とは、そうした場所の事だった。

クレドネエを一刻も早く捕らえ、事の真相を暴き、諸侯に対して本当に戦いを挑むべき相手なのが誰なのか示さなければ、
フォリヴァス家の劣勢を覆す事はできない。
宰相大公の忠実なる下僕であるリュイーズとしては、それこそ血眼になって彼を探さなければならないだろう。

それでも、ふと、足を止め、かつての栄華が見るも無残な姿に成り果てた王都を思いやる事がある。
天使たちに見守られた王国の都は、豊かで平和な都市であっただろう。
だが一度権力闘争と戦乱の渦が巻き起こり、その傷が癒される事なく再三戦いの渦中にあり続けた都は、
もはや都と呼ぶのもはばかられるものになっていた。破壊されたかつての美しき『王都』は見るものを嘆かせる。

アンゲルウルプの廃墟には、何故か林檎の木が多く育っている。
王都の時代から生き残っているのか、それとも新しい住人が少しでも生きる糧にしようと、実を生らす林檎を植えたのか、
それは解らない。もしも『天使王国』全盛の時代から林檎の木がアンゲルウルプの町並みを彩っていたのなら、
その白い花だけが、かつてと変わらず可憐な花を咲かせていると言う事になる。

その事に気付いて顔をあげれば、白い花を満開に咲かせた林檎の木が、侘しいアンゲルウルプの街中で、
廃墟の片隅で、誇らしげに立っているではないか。

リュイーズの望みは平和だ。誰もが安心して暮らせる世界だ。心無い突風に花びらを散らしながら林檎の木は立っていた。
人々の争いにも負けずに、林檎は今年も秋になれば豊かな実りをつけるだろう。
人々の行為を黙って眺めながら、林檎はただただ実をつけるのだろう。

ふとそんな事に思いを馳せて、彼女は涙をこぼしそうになった。どうしてそうなったのかリュイーズ自身にも解らなかった。
荒々しい人の営みにも負けずに可憐な花を咲かせる林檎の木に感動したのか、
そんな小さく健気な花々に対して人は何をやっているのだろうかと悲しくなったのか。もしかしたらその両方なのかも知れない。

慌しく人の世の移ろいにかまけてばかりで、彼女は春に咲く花の事を忘れていた。
もしも平和になったなら、今度は地を耕し、花が咲くことを待ち焦がれ、
雨の多寡に憂い喜び、陽射しの強さ弱さに一喜一憂するのだろう。

そうなればいい。それだけを思い煩うならばどんなに幸せだろう。

彼女はふと、そんな事を考えた。

しらみつぶしに廃墟の探索を開始して十日あまりが経過した頃、ようやく広大な旧市域の半分ほどを調べた頃だろうか。
自警団の一人が、自分が属する機織業者ギルドの長を経由し衛兵隊長を通じて気になる知らせをもたらした。

大きな屋敷跡と思われる建物が並ぶ街区に、人が住んでいた形跡があるという。
難民や浮浪者の類が勝手に住みつく場合がほとんどなのだが、盗賊ギルドの面々が発見したそれは、

巧妙に偽装されていて、事実自警団の人間では見つける事ができなかったそうなのだ。

しかし盗賊ギルドからそんな報告は受けていない。それどころか幹部級の人間は皆出払っている様子だ。
衛兵隊長とリュイーズは同時に気付いた。

「連中、抜け駆けをやる気だ」

「隊長、集められるだけの衛兵をこの地区へ回して。その建物を包囲します。
それから調査官主任への報告を。私はこれからその建物へ向かいます」

盗賊、暗殺者ギルドは面子を重んじる。自分達を介さないで仕事を請け負う者は縄張りを侵す許しがたい違反者だ。
自分たちの手でクレドネエを捕らえれば、ギルドの矜持を保ち、またフォリヴァス家に大きな貸しをつくる事ができる。
だからこそ盗賊ギルドはリュイーズに告げずに単独で仕掛けようとしているのだ。

盗賊ギルドの連中がいくら死のうが、それはリュイーズの知った事ではなかった。
ただ彼らの失敗でクレドネエを取り逃がし、宰相大公閣下に危害を及ぶ事だけは避けなければならない。

後続の手配、執政宮殿への知らせは衛兵隊長に任せ、
リュイーズはとりあえずその場にいた衛兵の一隊を率いて問題の建物に向かった。

かつては中庭を抱え込んだ豪奢な邸宅であっただろうその建物は、今は石材剥き出しの骸骨のような印象しかなかった。
豪奢といっても中産階級よりやや規模が大きいというだけで、広大な庭園を抱え込んだ宮殿のようなものではない。

石材ギルドに属する自警団の者が地図を持っている。

この建物のものではないが、『天使王国』繁栄期には似たような作りの建物がアンゲルウルプのそこかしこで建てられている。

「構造は同じです。道路から入って一つ目の中庭。その周囲に部屋が囲むように並んでいます。
奥の部屋を抜けると二つ目の中庭があります。その周囲に同じように部屋が並んでいて、その建物が三階建てになっています」

石材ギルドはアンゲルウルプの廃墟から建材を採取して、新しい建物に使ったり新しい彫像の材料にしたりしている。
だから彼らにとっては廃墟は宝の山といってもよかった。それだからこそ図面を作って持っているのだが。

「昔の建物には下水があると聞くけれど・・・」

下水道を使って逃げられると厄介だ。アンゲルウルプの地下に迷路のような下水網があるという話は有名だったが、
石材ギルドから参加している自警団員は否定した。

「この建物の下には人間がもぐりこめるような広さの下水は走っていません。
盗賊ギルドの面々は我々に口止めを要求した後、二階に上がっていきました。
どうやら人がいた形跡があるようなのですが、まだ彼らは戻ってきていません」

嫌な予感がする。説明を聞き終えたリュイーズは引き続き他の自警団員に包囲を続けてもらうよう依頼すると、
早足で建物の中に入っていった。

外見の印象そのままに、建物の中も少しでも価値のありそうなもの、再利用できそうなものは全て剥ぎ取られ、
剥き出しの骨格だけが彼女の目に飛び込んできた。その痛ましさにやや怯みながら彼女は中庭を抜ける。

だがさらに進んで奥の中庭に入った時、真っ先に目に飛び込んできたものを見て驚いた。

白い小さな花を満開にさせた林檎の木が、中庭の中央に誇らしげに立っていたからだ。
日が傾いた空には夕暮れの気配が迫っていた。思わず見上げた彼女の目に、吸い込まれそうな紺碧の空に映る白い花房が映った。
その美しさに目を奪われそうになりながら、しかしリュイーズはそれどころではないと建物の中に入っていく。

二階への階段には、体格はいいけれども心細そうな若い自警団員が立っていた。見張りのつもりなのだろう。
腕っ節はあるのだろうけれど実戦経験は皆無なのだろう。リュイーズは苦笑した。

「どうです？」

声をかけられて青年は驚いた様だが、百戦錬磨の調査官とはいえ若い娘のリュイーズを見て露骨に安堵の表情を浮かべた。

「特に変わった事はないです」

「盗賊ギルドの連中が上に上がったとか」

「半刻ほど前ですかね。目つきの鋭い連中が三人ほど上がっていきました。それから何も起こっていません」

何も起こっていないから安心だと彼は言いたそうだ。だがリュイーズは逆にそれで心配になる。
この建物にクレドネエがいなかったり、早々に捕らえたならば、
彼らは意気揚揚と戻ってきてリュイーズや衛兵隊長に事後報告してくるだろう。
調べるのにそんなに手間がかかる建物とは思えない。

ここが当たりだとして盗賊ギルドの面々が帰ってこない場合は・・・。
見張りに立つ青年をそのままにしてリュイーズは慎重に階段を上がった。だが半ばまで登ったところで彼女の顔色が変わる。

「これから私は二階に上がります。もし私も先に上がった人たちと同じ時間戻らなかったら、
衛兵隊長に騎士団の突入を要請して下さい。いいですね」

「それはどういう・・・」

「いいですね」

質問を遮りリュイーズは警戒を強めて二階に上がった。彼女の鼻についたのは血の臭いだった。
盗賊ギルドの連中は返り討ちにあったのだろう。彼らの安否を確認する為にも行かなくてはならない。
だがそれよりも何よりも、ここで、この暗殺者探索を宰相大公自ら命じられた彼女の手で決着をつけたかった。

二階には光がなかった。血の臭いがけぶる闇の中へ、リュイーズは自らの任務に決着をつける為に踏み込んでいった。

ポルメリアが足かせになっている彼女の重装鎧を脱いで魔法の背負い袋にまとめて仕舞いこんで、
身軽な状態で宿場の一番足の早い馬を昼夜飛ばしてアンゲルウルプへ向かったのは、メルクスの馬屋で主人に注意されたからだ。
袋の中が異次元と繋がっている袋に重い装備を入れてしまえば、それだけ馬の負担が軽くなる。
途中で彼女を狙うものに襲われた時、鎧を着ていないのは不利だったが背に腹は変えられない。
今の彼女の懸念は、自分自身の身の安全よりもリュイーズとクレドネエの事だった。

二人がぶつかり合う前に自分がアンゲルウルプに辿り着けば、或いは穏便に全てを収められるのではないか。
そんな淡い期待がポルメリアを急がせた。

宿場宿場で早馬を乗り継ぎ、昼夜休まず馬を走らせた彼女がアンゲルウルプに辿り着いたのは、
メルクスを発ってから八日あまり後だった。食事も休憩も身支度も、宿場で馬の手配をしてもらっている間に済ませている。

自慢の蜂蜜色の金髪も三つ編みがほどけかかっているような状態だ。
そのまま執政宮殿に入りたかったが、何処から見ても不潔な不審者にしか思われない状態で行っても追い返されるだけだ。
午前中にアンゲルウルプに着いた彼女は宿を取り、念入りに身支度をして昼食を取り執政宮殿へ向かった。
宮殿の様子は厳戒態勢にはなっていたが、しかし混乱した様子はない。
まだ何も起きていないのだと安心するが、リュイーズ・ポントワへの取次ぎに手間取った。
もともと調査官という役目が表沙汰のものではない。それを正面玄関の門衛に尋ねたのだから話が遠回りになる。
宮殿の警護は最精鋭のオヴェスマーレ騎士団が勤めている。表の顔である彼らが裏方のリュイーズの事を知る筈もなかった。
手詰まりで待たされてジリジリと時間だけが過ぎていく中で、街の衛兵隊が飛び込んでくる。
それを受けて騎士団の動きが俄かに慌しくなった。
「何事です?」
「お尋ねのリュイーズ・ポントワとやらからの知らせだ。騎士団に出動待機命令が下った」
フォリヴァス家最精鋭の軍団に出動待機とは穏やかではない。焦るポルメリアに緊張が走った。
「リューは、リュイーズ・ポントワは何処です?」
「そこの衛兵隊に聞けば知っているだろう。彼らは一緒に行動しているらしいからな」
それだけ聞き出したポルメリアは礼もそこそこに待機している衛兵の一人を捕まえた。
そして、やっとの事で今日になって動き出した事件を知る事ができた。
クレドネエが潜伏している場所。そこにもリュイーズがいる。手持ちの武装はまだ装備していない。だから足は早い。
簡単な地図を衛兵に書いてもらい、それを受け取る事さえももどかしく感じながらポルメリアは駆け出していた。
急がなければ。間に合わなければ!
白い林檎の花びらが舞う空に、ゆっくりと夕闇が降りてきた。黄昏がアンゲルウルプを覆おうとしていた。